

## 内山真龍の出雲国踏査

——『出雲日記』『弥久毛乃道草』『筑紫日記』の整理——

大日方 克 己

(島根大学法文学部)

### 摘 要

遠江の国学者内山真龍は門弟ら五人とともに、天明六年二月、出雲国を踏査し、翌年出雲国風土記の注解書『出雲風土記解』を執筆した。この踏査旅行を記録した旅日記、内山真龍の『出雲日記』、高林方朗の『弥久毛乃道草』、山下政嗣の『筑紫日記』が残されている。その三日記の出雲国内部分の対照表を作成し、踏査の実態と特徴を分析する。そしてそれが『出雲風土記解』にどのように反映されたを明らかにする。

キーワード…内山真龍、高林方朗、山下政嗣、出雲風土記解、出雲国

### 一 『出雲風土記解』と出雲国踏査

遠江国の国学者内山真龍が天明六年（一七八六）に出雲国に旅し、その実地見聞もふまえて、翌天明七年に『出雲風土記解』を撰述した。『出雲風土記解』は寛政五年（一七九三）に出雲大社に奉納され、その刺激を受けた千家国造家の俊信が、出雲国風土記の初めての版本『訂正出雲風土記』を文化三年（一八〇六）に開版した。『出雲風土記

解』は、出雲国風土記の最初の注解書である『出雲風土記抄』（岸崎佐久次、天和五年（一六八五）自序）をふまえている。『出雲風土記抄』『出雲風土記解』『訂正出雲風土記』により形成された出雲国風土記テキストと解釈、認識が、近現代の出雲国風土記研究に大きな影響を与えていった。

このような重要な位置を占める『出雲風土記解』の解釈や思想がどのように形成されたかを明らかにしていくためには、天明六年の出雲国踏査がどのようにふまえられたかの検討は必要である。

内山真龍らの出雲国の踏査は、長崎・博多・宇佐神宮や厳島神社などをめぐる西国旅行の途中に立ち寄ったものである。この旅のメンバーは、真龍の外伯父山下政嗣と、門人の高林方朗・小国秀穂(重年)<sup>1</sup>・鈴木書緒(文雄)・山下政定(政嗣の子)の計六人で、内山真龍の『出雲日記』、高林方朗の『弥久毛乃道草』、山下政嗣の『筑紫日記』の三点の旅日記が知られている。これらの旅日記と『出雲風土記解』『出雲風土記抄』との関係の分析が課題になる。

『出雲日記』と『出雲風土記解』『出雲風土記抄』の関係についてはすでに吉川隆美が検討を加え多くを明らかにしている<sup>2</sup>。なかでも实地見聞が『出雲風土記抄』を下敷きに行っていることを指摘した点は重要である。また岡宏三は『出雲日記』を中心に旅の全体像と出雲大社参詣について検討した<sup>3</sup>。その後吉川は『弥久毛乃道草』を翻刻、紹介するが<sup>4</sup>、『弥久毛乃道草』とを合わせた分析には至っていない。筆者は旧稿で、旅の二年前の天明四年(一七八四)に、高林方朗が本居宣長の『出雲風土記抄』を书写しており<sup>5</sup>、そのため『弥久毛乃道草』にも『出雲風土記抄』をふまえた記述が多くみられることを指摘した<sup>6</sup>。しかし『筑紫日記』が未翻刻のこともあって、『出雲日記』『弥久毛乃道草』『筑紫日記』を合わせた分析は十分とはいえない。『出雲日記』は後に再編集して、絵を描き加えたりして成立したものとみられ、日付けを分けずに数日分をまとめて記したり、途中をとばしたりしている箇所が目立つ。『弥久毛乃道草』は全体として走り書きのような筆跡で、毎日の忘備録のようなものだと思うれるが、『出雲風土記』『出雲風土記抄』を意識した記述が目立つ。一方『筑紫日記』は小国秀穂の序が付けられ後日浄書されたものとみられるが、旅の全行程を通じて比較的満遍なく毎日の行程や見聞を記し、『出雲

日記』や『弥久毛乃道草』に記されていない事柄も少なくない。また和歌や歌枕のみならず、政嗣の俳人としての問題関心から、句や俳人の遺蹟の見聞記事もみられる。三者三様の関心とスタイルがうかがえる。三つの旅日記を併せて旅の実態と見聞を分析し、風土記解釈がどのように形成されていたのかを明らかにしていかなければならない<sup>7</sup>。

本稿ではその基礎作業として、彼らが天明六年二月十五日に米子に入ってから、二十四日に石見国に抜けるまでの間の『筑紫日記』を翻刻、紹介するとともに、その間の三つの日記の比較対照表(表2)を作成し、出雲国内での旅程の概略を明らかにしたい。図1として彼らの出雲国内のルート概略を地理院地図上に示した。あわせて『出雲風土記』『出雲風土記抄』『出雲風土記解』との関係の一端も示したい。

本稿で用いる史料と典拠は特記しない限り次の通り。

①『出雲日記』 築瀬一雄・熊谷武至編『碧冲洞叢書第九十三輯日記紀行集第五冊』(築瀬一雄、一九七〇年)所収の翻刻を、底本の浜松市立中央図書館所蔵自筆本(ADEAC/浜松市立中央図書館/浜松市文化遺産デジタルアーカイブ)により校正。

②『弥久毛乃道草』 吉川隆美「高林方朗『弥久毛乃道中』―伯雲・石道の翻刻」(島大國文)三三二、二〇〇八年)の翻刻を、底本の浜松市立中央図書館所蔵自筆本により校正。表題は、「道中」ではなく「道中」と判読できるので、「弥久毛乃道草」とすべきである。浜松市立中央図書館編『高林家文庫目録』(一九八七年

再版)には「弥久毛乃道中」(五二頁)とあるが、現在、同館も「弥久毛乃道草」に訂正している。

③『筑紫日記』 皇學館大学附属図書館所蔵(北岡文庫)本を翻刻。

④『出雲風土記抄』 浜松市立中央図書館所蔵(高林家文庫)高林方朗書写本。風土記本文も、同本所載文を引用した。

⑤『出雲風土記解』 『出雲風土記解』写本―横山家蔵甲本翻刻  
本文編(上・中・下) (出雲の石神信仰を伝承する会、二〇一六年)の翻刻を、島根県古代文化センター所蔵横山家甲本写真により校訂。

引用にあたっては、以下のようにした。

- ・ 割書は「」で示した。
- ・ 旧字体は適宜、当用漢字に改め、句読点を補った。
- ・ 判読不能部分は□、「」などで示した。
- ・ 人名・地名、誤り、意味不明部分など、適宜( )で補った。

また本稿では、『出雲日記』『弥久毛乃道草』『筑紫日記』を、それぞれ『出雲』『道草』『筑紫』、『出雲国風土記』は風土記、『出雲風土記抄』は風土記抄、『出雲風土記解』は風土記解と略記する。

## 二 旅の概略

表1に旅の全行程を示した。内山真龍らは天明六年正月二日に遠江国豊田郡大谷村(浜松市天竜区)を出発し、名古屋から美濃路・中山道を経て二月四日に京都に着いた。その後西国街道を進み、姫路

から出雲街道を美作に入った。二月十四日(グレゴリオ暦一七八六年三月十三日)には積雪五、六尺の四十曲峠を越えて伯耆国へ、そして二月十五日に米子に到着、宿泊した。十六日、二十四日の九日間を出雲国踏査に費やし石見国大森へと向かった。その後は、博多から大宰府を見て三月九日に長崎へ。帰路は、久留米、宇佐神宮、厳島神社などに寄りながら西国街道を東へ、大坂、京都に滞在した後、名古屋を経由して浜松に帰り着いたのが四月十五日、三か月近くにわたる大旅行だった。

### 『出雲』に

やくも立出雲国なる熊野・杵築の大社を拝ミ奉らんとねき忍ふ年月積りぬるを、何れの年にか有けん、神風のいせの国草蔭阿濃のをち(谷川士清)か、出雲風土記てふ物を、是を見てその国形を計り上つ代の伝へをもて知てよ、と示さるゝに、折鈴いす、のミやよりも、おすひ飯高の翁(本居宣長)よりも、同じ風土記を乞得て、もとよりわかもたると、合見れハ、闕たるも誤れるも少なかりけり。されと猶疑ハしき所くも有、いてや其社に詣、国形をも見廻りて昔今の変れるさまをも知まく思ふに、と、記すように、この旅の目的には出雲大社参詣と出雲国風土記の現地を見聞することがあった。『筑紫』でも

や雲たつ出雲の国形見まくほつして、尚も豊国の宇佐、しらぬ火の筑紫までもと、

と記し、出雲国を实地見聞することが、旅の大きな目的の一つだった。高林方朗が書写した本居宣長の風土記抄は、浜田藩の学者小篠敏から送られてきたものを、宣長が子春庭に書写させ、安永八年五月に宣長自身が校合した写本である。この旅で出雲を出た後、二月二十六

日に石見国浜田で小篠敏を訪ねようとしたのは、こうした風土記抄をめぐる関係のなかでのことでもあろう。

『筑紫』では

吾が故郷引馬の浜松より出にしくすし小篠何某そ、この府の君に仕奉りて年を経て、此所に住めるよし聞えけれハ、いとなつかしく其度にて尋ぬるに、其ぬしそ、仰こと有て、去りし月、筑紫瀉へまかて、今そまさすと云えば、いとむ意なして止ミぬ。

と、同郷、浜松出身の小篠敏<sup>10</sup>を訪ねたが、藩命で筑紫へ出かけていて不在だったと記しているが、『出雲』には

故郷人小篠某そ知へき。周防守の御もとにつかへて爰に在ときくと、友とちいふを、又人聞て、唐船の流れ着たるを常のためしに依りて送り返すと、筑紫に退れりといへハ

『道草』でも

こ、なる里人語らく、「」は唐人、ツマノ浦四五人たゞよひ付り、此月の初つかたに、かゝる事有て、かの音に聞くし、くすし小篠道中主は長崎に行あとなん。

とあり、小篠敏(道中)を訪ねたが、石見に漂着した「唐人」(朝鮮人)を送還するために長崎に出かけているという事情を記している。

### 三 出雲国の踏査と『出雲風土記抄』『出雲風土記解』

(一)二月十五日 米子

前日四十曲峠を越えて伯耆国に入り板屋原(板井原)に宿泊した一行は、根雨、船場、二部宿を経て米子に到着、東町の唐津屋に宿泊した。

『出雲』によると、まず真龍は宿の主人に黒田の駅への道を尋ねるが、杵築への参詣は米子から船で松江、平田に向かうのが近いので、駅路は知らないと言われ、同宿の神魂神社神主の秋上得国を紹介される。八重垣・意宇・熊野・伊邪那岐(真名井)・掛屋・神魂の意宇六社を参拝すること、秋上邸に宿泊すること、福見又八(藤原三省)を紹介すること、などが得国から提案され、ほぼそれに沿った踏査をすることになる。

風土記解意宇郡黒田駅の項の記述が秋上得国の影響を受けていたことは前稿で指摘したが<sup>11</sup>、意宇六社のうちの意宇社についても同様である。

得国のあげた意宇社は阿太加夜社を指すとみられる<sup>12</sup>。風土記の意宇郡条には「在神祇官社」(官社)として由宇社、「不在神祇官社」として阿太加夜社がみえ、これらについて風土記抄は次のように記す。

由宇社者、須佐表命所造国小処而、在黒田駅出雲村芦高神司之篁叢中一小祠、是也。阿太加夜社は亦古者在乎同郷今宮帳、後合祭于芦高宮一耶。

風土記解は、由宇社について「意宇の誤か」と、意宇社ではないかとして風土記抄の芦高の祠の篁中にあるという説を引用する。阿太加夜社についても

鈔云、由宇ノ社、同所在「黒田ノ駅出雲村」。後分三祭于芦高宮一。按二阿陀加夜奴志多支吉比売を斎所にて地名に負か、意宇川の東。

と、風土記抄を引用して意宇社のことだとし、後に芦高社を分け祭ったと、由宇社、意宇社、阿太加夜社、芦高社の関係を解している。

このように意宇社は阿太加夜社であり、意宇六社の一つとしている

が、すでに十八世紀前半には意宇六社からはずされ、かわりに六所神社が入り、現在に至っている。十八世紀後半でもなお意宇六社に阿太加夜社を入れている秋上得国の認識には注意されるところ<sup>13</sup>。

渡部彝『出雲神社巡拝記』<sup>14</sup>でも「出雲郷村足高大明神（記云）阿太加夜社（祭神）あだかやぬし、たき、ひめの命」「同社合殿」意宇神社（記云）由宇社（祭神）すさののをの命」としているが、千家俊信『出雲国式社考』<sup>15</sup>は由宇社を『延喜式』神名式の「同社（玉作湯神社）に坐す韓国伊太氏神社」にあてている。それを加藤義成が継承し、由宇社が玉作湯神社と同所であることが通説化している<sup>16</sup>。

(2) 二月十六日 米子↓出雲郷

雨のなか米子を出立した一行は、忌田（陰田）から出雲国に入った。吉佐、門生、安来を経て、井尻川（伯太川）、戸田川（富田川、飯梨川）を渡り、意東、掛屋を過ぎ、出雲江（出雲郷）の岸文蔵方に宿泊した。『道草』では「井尻川を橋渡す。是は川上文理（母理）の里より流落る古への伯太川ならん」と記す。風土記抄の「白田川者、能義郡母理郷井尻川也」をふまえたものである。風土記解は「里人ハ白田川と云う。川下は安来ノ郷にて海に入る。鈔ニ云う母理ノ郷、井尻川也」とする。

富田川については、『道草』は「戸田川を橋渡す。こは古の野城川ならん」と記す。風土記抄は意宇郡飯梨川の項で「飯梨川者乃今富田川也」としている。風土記解も、意宇郡飯梨川の項で

飯梨川の上ハ仁多ノ郡玉嶺山より流るゝを比太川と云。枯見ハ山ノ名、田原は村ノ名、飯梨ハ郷ノ名、郷ノ中富田村にてハ富田川とも云。海に入所にてハ野城川と云。

また仁多郡比太川の項で

この川の海に入所を野城川と云。飯梨郷にてハ飯梨川と云。としている。

『筑紫』は井尻川、富田川について「何れも砂川の広瀬に竹の編橋つらねて間、続に掛渡せり」と記している。風土記意宇郡野城駅の項や道度条に、飯梨川に長三十丈七尺・広二丈六尺の野城橋が架橋されているとみえることを意識して、今の橋の状況を記したものと解せよう。

『筑紫』ではまた蛸島（大根島）の眺望を記述している。「此州の蛸島てふ家居はさたかならずとも近に煙たつまで見へ渡り」は、風土記島根郡蛸島・蜈蚣島の「東辺神社、以外、皆悉百姓之家」を承けたものであろう。

掛屋社に参詣したかは各日記の記述からは不明。出雲郷に宿泊したのは、秋上得国の勧めに従って阿太加夜神社に参詣するためだともされる<sup>17</sup>が、特に記述にはみえない。米子から出雲江まで六里なので、時間的余裕はある。それだけでなく、風土記抄意宇郡黒田駅条で黒田駅・意宇郡家・国庁を比定している出雲江を見聞するためでもあったと思われる。

風土記道度条では野城橋から西行する山陰道は「国庁・意宇郡北十字街」で真西道（山陰道）と柱北道（隠岐路）に分岐するとしている。風土記抄所引の本文は「十家衝」としているが、風土記抄は「国庁即意宇郡出雲村十字街也」とし、国庁と意宇郡家は同所で、出雲江村にあったとしている。

また風土記意宇郡条黒田駅の項では、黒田駅は意宇郡家と同所で、もと黒田村にあったが、東に移転したと記す。風土記抄はもとの郡家

は阿太加夜の畝、竹屋村田疇の客大明神の森あたりにあって、今の郡家は阿太加夜の市郷にあるとしている。風土記解もこの抄文を引用する。

出雲国府の所在地について、その後も出雲郷(松江市東出雲町)説が長く定説化していたが、一九六八年の発掘調査で松江市大草町の六所神社周辺に出雲国府跡遺構が発見されたことは周知であろう<sup>18</sup>。

(3) 二月十七日 出雲郷↓神魂神社(秋上邸)

雨のなかを出雲郷から意宇川沿いを西へ向かう。『出雲』では途中、黒い土の場所を見てこれこそ黒田だとしている。伊弉諾宮(真名井神社)に参詣するが、『道草』にしか記述されていない。

真名井神社背後の茶白山について『道草』は「古へのアツガキ山也。烽有」と記している。風土記は次のように記している。

暑垣山、郡家正東八十歩〔有蜂烽嶙〕(意宇郡条暑垣山項)

暑垣烽意宇郡家正東廿八里十歩(烽火条暑垣烽火)

風土記抄は、暑垣山の項では何も触れず、暑垣烽の項でも「今西尾村山歟。或曰、星神誤字歟、不知是非」と、定見を示していない。

風土記解では、暑垣山項に、

暑垣山未考。黒田駅の跡近き、いざなみ之山に烽の跡とて、其跡白に似たれば俗人茶白山とも云所有。古郡家より八十歩と云に叶。又烽火ノ条ニ云、暑垣ノ烽火ハ廿里八十歩と有。廿里ハ誤成べし。暑ハ青の誤か。

暑垣烽の項では

廿里八十歩ハ野城駅ノ辺に当。意宇郡の記に暑垣山ハ郡家正東八十歩有烽と記。是に依て廿里ハ誤とす。黒田近き所に俗茶白山

と呼山有。此の山ノ項、茶白形に似たる所有を烽の跡と云伝ふ。此記、五所のうち、一所ハ国庁近く有るべし。今又、手間の要害とて手間山に烽有と俗人云り。

と記す。国庁近傍にも烽があるはずだとして、実見をふまえて暑垣山を茶白山だとみたのであろう。現在は茶白山ではなく、安来市能義町の車山に比定するのが一般的である<sup>19</sup>。

神魂神社の秋上邸に立ち寄ってから、雨のなか難儀しながら熊野神社に参詣する。秋上邸にもどって宿泊するが、得国はまだ帰宅しておらず、長子の神主大江、次子の操<sup>20</sup>が接待し、夜遅くまで風土記について語り合ったという。なお『出雲』によると得国には他に左金吾という子がいて杵築に仕えているという。後述する杵築で一行を接待する高浜左金五である。

(4) 二月十八日 神魂神社(秋上邸)

秋上得国の紹介で、松江藩士福見又七(藤原三省)が来訪し、一日中、風土記について語り合った<sup>21</sup>。

『筑紫』では、意宇川で獲れた鰯が食膳にのぼったことを特記している。『道草』も十九日に伊久比(鰯)と十六島の生のりのことを記している。鰯自体は、遠江国でも珍しいものではない。真龍が後に撰述する『遠江風土記伝』にも川の記述のなかに散見する<sup>22</sup>。

「この川の名に負鰯」とは、風土記意宇郡意宇川の項に「有年魚・伊久比」とあることを指す。風土記解では意宇郡伯太川の項に「伯太川と意宇川のうぐひ、異に勝れり」、意宇川項に「伊具比ハ今モ有此所ニ。国廻セシ時、大庭ノ得国カ此川辺ニナツリシヲ思ニ異ニ勝タリ」と記している。

『道草』の十六島海苔の特記は、風土記抄が楯縫郡条弥豆椎長里の項で「今十六島浦也、此処紫葉勝諸島」。故、毎年季冬之月課而充貢。世稱之為「紫葉之上品也」と記していることを意識したものである。風土記解でもこの風土記抄の文をそのまま引用している。

また『筑紫』によると、得国が帰宅して、「国めぐりに、名所の落ちることなく、その直路ハかくなん」と、出雲国内で見聞すべき地を示している。十九日以降の一行の実見地とルートに影響していると思われる。その後、大江に案内されて神魂神社の伝世の宝物も見せてもらっている。

(5) 二月十九日 八重垣神社↓玉作湯神社↓本庄

朝、歌を詠み交わして秋上邸を出立。八重垣神社に参詣し、忌部川沿いから玉湯に出て玉作湯神社に参詣する。八重垣神社は、風土記抄、風土記解ともに風土記・延喜式の佐久佐社に比定している。また風土記抄は、風土記の野白川を忌部川にあて、玉作社を玉作村にあるとしている。

その後宍道湖畔に出て布自名を通り松江に入るが、その間『道草』は

西北道也。野城の里の北に、西へ入る山中道の古びたる有。こは古への正西道也。

と記す。風土記には、玉作街で正西道（山陰道）と正南道（在南道、大原郡家を経て飯石郡家や仁多郡家につながる）が分岐するとあり、分岐点や古代山陰道の痕跡も探索している記述とみてよい。

風土記巻末の道度

正西道自十字街西一十二里、至野代橋長六丈広一丈五尺、又西七

内山真龍の出雲国踏査―『出雲日記』『弥久毛乃道草』『筑紫日記』の整理―(大日方克己)

里至玉作街、即分爲二道（一正西道、正南道）。

に対する風土記解は、野代橋について「乃木より布自奈の方へ渡す。此橋今ハなし」、玉作街について「今湯市の辺、入海の渚」と風土記抄によらず、実見を踏まえた記述をしている。

その後、『筑紫』では「いにしへの朝酌の狭渡を今は京橋とてうち渡り松江に至る」と記しているが、風土記抄も風土記解も、風土記の朝酌渡（朝酌促戸）を馬潟（意宇郡）と福富村（島根郡）の間に比定している。松江よりも東方である。朝酌渡が京橋で、そこを渡り松江に入るといふのは誤認識であろう。

一行は松江を通り過ぎて、本庄村で爲五郎方に宿泊した。松江から本庄までの道を、『道草』は「是より山のあはひを東に入れて、古の千酌海道也」と記す。『筑紫』が「千酌の渡りを右に見なして、富士貴見山を麓を過ぎ」と記しているが、「朝酌の渡りを右」の誤認識ではないだろうか。彼らは、松江の東、富士貴見山（布自積美山、嵩山）の北側を本庄へ抜けるルートを、風土記に記す国府と千酌駅家（隠岐国への出航地）を結ぶ隠岐道（千酌海道）と認識しており、それに引かれて「千酌の渡りを右」と記してしまっただけではないかと思われる。

本庄に宿泊したのは、一つには舟運の拠点だったことによるが、一つには風土記抄が島根郡家を「今本庄・新庄二村之間」（島根郡条、道度条）に比定していることに影響されたとみられる。『出雲』でも「昔の郡家の所より船に乗りて」と、本庄村を郡家として記し、風土記解でも「今の本庄村」とする。実地見聞の結果、本庄村を確信したのであろう。

現在は、本庄と松江市街地の中間、松江市福原町の芝原遺跡が郡家

の有力候補とされ、最近では中村太一が、風土記編纂段階ではそれより西の松江市坂本町あたりで、その後芝原遺跡に移転したとする説を提起している<sup>23</sup>。いずれにせよ本庄には比定されていない。また隠岐道(枉北道)のルートについても諸説あるが、朝酌渡の遺構とみられる大橋川北岸の朝酌矢田Ⅱ遺跡、その北の隠岐道遺構とみられる魚見塚遺跡があり、そこから嵩山の西麓を北上し、福原から長見を経て、枕木山の東の山間部を越え、日本海側の千酌へ通じたと考えられている<sup>24</sup>。

(6) 二月二十日 本庄↓美保神社↓本庄

本庄から「そるか」と名付けられた船で美保神社をめざした。途中方朗は、弓ヶ浜や大山の景観を記している。美保神社に参詣した後、また船に乗り島根半島の北側にまわった。『出雲』によると、加賀の潜戸に行こうとしたらしい。しかし大荒れの海に転覆しそうになつて、恐怖にかられながら船を乗り捨て上陸した。磯伝いに歩き山を越えて長浜に出たというから、軽尾から雲津あたりの磯に上陸したのだろうか。長浜から島根半島南側の海岸沿いに、福浦、宇井、森山、下宇部尾、手角、万原、長海、野原を経て本庄にもどり、前夜と同じ宿に泊まった。

(7) 二月二十一日 本庄↓松江

強い風雪と寒さのなか本庄を出立、昼前には松江に着いたが、風雪と寒さでそのまま八軒屋町の荒布屋に泊まった。

(8) 二月二十二日 松江↓杵築

雪が残るなか、松江から秋鹿郡、楯縫郡を経て杵築に向かった。『道草』では島根郡と秋鹿郡の堺の浜佐田村で五間ほどの土橋を渡り、古への佐太橋だと記している。

風土記では、島根郡家で隠岐道から分かれて、宍道湖北岸を秋鹿郡、楯縫郡を経て出雲郡家近辺で正西道(山陰道)に合流する枉北道が記されている。枉北道の島根・秋鹿郡堺の佐太川に長三丈、広一丈の佐太橋が架けられていることが記されている。風土記抄は今の船木橋とし、風土記解は「佐太橋ハ島根と秋鹿郡の堺、古道ハ湖の北に有と聞。此橋は今ハ佐太湖の南端に渡して船来橋とも云」とする。

また「北に海有。古へは大なる海なるを、天平の頃しもエリ堀、岸壁として二つの川を作りて、北の海に流入れ」と記しているが、これも風土記抄が引用する風土記本文、秋鹿郡条の惠曇浜の記述「彫鑑磐壁三所」「其中通川北流入大海」によっている。風土記解は、「鈔本と又一本には三所と有て、小字の文に厚二丈高一丈の字増」として、「三所」ではなく「二所」だとしている。

『道草』では大垣の里の足高社と下大野村の湖岸の津森大明神を見ながら進んでいったとする。風土記秋鹿郡条の宇知社を大野郷の阿内谷大明神、大津野神社を津森大明神とする風土記抄をふまえたものである。阿内谷大明神は高野宮阿内大明神のことで、遅くとも天正十年(一五八二)以降、「足鷹大明神」「足高大明神」「鷹之宮」とみえる<sup>25</sup>。方朗は「いとふるびたり」と印象を記している。現在の研究では、宇知社の比定は不明である<sup>26</sup>。

一行は、宍道湖岸を離れ楯縫郡から神門郡へと進む。『筑紫』では簸川とかいと大きな流れを左に見てしこそ、むかし神戸の海に落て杵築の海辺に入しを、末の世、川筋変りて、今ハ松江の水う



ミに流る、意宇の郡の浦に出るとなり。

と、斐伊川（出雲大川）は出雲平野を西流して神門水海に流れ込んで  
いるという風土記の記述をふまえ、近世には東流して宍道湖に流入す  
る川筋に変わったことを記す。

石見の佐比売山（三瓶山）が見え、白居易の詩（あるいは『枕草子』  
か）にみえる香爐峰を引き合いに出しているが、風土記の国引詞章に  
みえる佐比売山を実見した感慨が記される。

『道草』によると、前日二十一日に松江藩主松平治郷が杵築大社に  
参詣して、翌二十三日には神楽を奉納すること、道中がきれいに  
整備されていたという。

この日から杵築の備前屋に二泊する。

(9) 二月二十三日 杵築大社・日御碕神社・高浜左金吾邸

まず杵築大社に参詣する。藩使が来て奉納されるという神楽を見て  
いる。服装から神楽の情景に至るまで詳細に記している『出雲』『筑  
紫』に比べ、『道草』の記述は簡単で、三者の関心の違いがみえる。そ  
の後、得国の子、杵築大社神官の高浜左金吾邸を尋ねる<sup>77</sup>。左金吾が  
杵築大社からかけつけ接待しようとするが、一行は日御碕神社に向か  
う。

杵築から日御碕までは海岸に近い山を越えて行く。『道草』は、「御  
崎山ト佐比売山ト正南北也」と記す。風土記の国引詞章では、新羅の  
三崎を引いてきて縫付けたのが「去豆乃打絶」から「支豆支御埼」ま  
での地、つまり島根半島の西端で杵築大社や日御碕が位置する陸塊  
で、引いてきた綱をつなぎ止めたのが佐比売山、綱が園の長浜だとす  
る。風土記抄は支豆支御埼を大社の辺とする。方朗は、その御埼山と

佐比売山（三瓶山）が南北の位置関係にあることを確認しているわけ  
である。実際、御埼山の西端（日御碕）と三瓶山はともに東経一三二  
度三七分上にある。

日御碕に参詣した後、杵築にもどるが、『道草』は帰途、山の上か  
ら南を望み、神門川、神門水海と日本海との間に園の松原が見えたこ  
とを記している。国引の世界を実見しているわけである。記述はない  
が、園の松原の先に佐比売山が見えていたはずであろう。これらは  
『出雲』『筑紫』いずれにも記されていない。

一行は杵築にもどって再び高浜邸に行き、夜遅くまで宴を繰り広げ  
た。『筑紫』では鯛、石決明（あわび）、出雲のり、早蕨などを特記し  
ている。風土記出雲郡条では、気多島、能島に生紫菜の記述が見え、  
「鮑出雲郡尤優」と記していることをふまえたものであろう。

(10) 二月二十四日 杵築↓石見国大森

杵築の宿を出立したが、主人左十が四五町も見送ってきたという。  
杵築から園の長浜を通って田儀へ向かった。国引詞章の園の長浜を踏  
査し、風土記の多伎駅を確認しようというものである。山陰道との  
合流点についても『道草』は記している。

石見国に入った一行はこの日、石見銀山の太森に宿泊する。そして  
長門、筑紫めざして旅を続けていくことになる。

#### 四 むすびにかえて

内山真龍らの西国旅行のうち、出雲国内踏査について、全行程と  
『出雲風土記抄』『出雲風土記解』の関係を提示してみた。最後に三日

記の対照表と行程の地図を付した。とくに『筑紫日記』はこれまで翻刻されたことがなかったので、『出雲日記』『弥久毛乃道草』とあわせて検討することで、より踏査の実態がみえてくる。内山真龍には、書簡をはじめ多数の史料が残されている。本稿ではそれらを含めた分析はできなかった。本稿の基礎作業をふまえ、『出雲風土記解』の解釈の形成、ひいては古代出雲像の形成を明らかにしていくことが今後の課題となる。

- 1 塩澤重義『国学者小國重年の研究』(羽衣出版、二〇〇一年)では、『筑紫日記』『弥久毛道草』などによりながら、この西国旅行のなかの小國重年について簡単にふれている。
- 2 吉川隆美A「内山真龍『出雲日記』の考察」『島根女子短期大学紀要』二二、一九八四年。
- 3 岡宏三「内山真龍の出雲大社参詣『悠久』九二、二〇〇三年。
- 4 吉川隆美B「高林方朗『弥久毛乃道中』について―解説と翻刻―」『島根女子短期大学紀要』二七、一九八九年、吉川隆美C「高林方朗『弥久毛乃道中』―伯・雲・石道の翻刻―」『島大国文』三三、二〇〇八年。
- 5 浜松市立中央図書館所蔵(高林家文庫)、天明四年四月五日高林方朗書写『出雲風土記抄』。
- 6 大日方克己「本居宣長・小篠敏ネットワークのなかの『出雲風土記抄』」『社会文化論集』一四、二〇一八年。
- 7 大日方克己「『出雲風土記抄』の成立と諸本」(島根県古代文化センター編『島根県立古代出雲歴史博物館所蔵 影印 出雲風土記鈔(雲州風土記)』、島根県教育委員会・ハーベスト出版、二〇二二年)では、風土記解意字郡黒田駅条の例を具体的に明らかにしたが、他の解釈全体を検討することはできない。
  - 8 山下政嗣は同日に遠江国豊田郡敷地村(磐田市敷地)の自宅を出発、途中で真龍、鈴木書緒と合流し、姫街道を三ヶ日に向かった。
  - 9 小篠敏、本居宣長をめぐる風土記抄については、大日方克己、前掲注(6)論文。
  - 10 小篠敏は、浜田・観音寺に残されている墓碑銘によると、享保十三年(一七二八)に浜松の松田玄統の子として生まれ、宝暦二年(一七五二)二五歳のとき浜田藩医小篠秀哲の養子となり、明和二年(一七六五)に養父の跡を継いで藩医になっている(浜田市教育委員会編『ふるさとを築いた人々―浜田藩追懐の碑人物伝』一九九二年)。浜松時代から、内山真龍らと交流があったかは不明。
  - 11 大日方克己、前掲注(6)論文。
  - 12 『松江市史通史編4近世Ⅱ』第七章第三節二「出雲を訪れた旅人/国学者の旅」(小林准士執筆)、松江市、二〇二〇年。
  - 13 「国学者の旅」、前掲注(12)書。
  - 14 天保四年(一八三三)開版。『松江市史史料編五近世Ⅰ』、松江市、二〇一一年。
  - 15 佐伯有義編『神祇全書』五(皇典講求所、一九〇八年)所収本による。天保十四年(一八四三)岩政信比古校訂、跋。
  - 16 加藤義成『出雲国風土記参究』至文堂、一九五七年、石塚尊俊「『同社坐』と『同社』」『古代出雲の研究』校成出版社、一九八六年、初出一九八〇年、瀧音能之「韓国伊太氏神社と日羅関係」『出雲古代史論叢』岩田書院、二〇一四年、初出一九九五年、など。
  - 17 「国学者の旅」、前掲注(12)書。
  - 18 島根県埋蔵文化財調査センター編『史跡出雲国府跡―九絵括編』第三章「出雲国府の研究史」(島根県教育委員会、二〇一三年)。

19 関和彦『出雲国風土記註論』（明石書店、二〇〇六年）二六二―三頁、島根県古代文化センター編『解説出雲国風土記』島根県教育委員会、二〇一四年、など。

20 たとえば天明四年（一七八四）「北島家孝神火相続日記」には、北島惟孝の火継神事に関わって、「神主大江」、「別火操」などとみえる（島根県教育委員会「意宇六社文書」（初版一九七四年、復刻二〇〇〇年）、神魂神社社家秋上家文書四一九号）。

21 『訂正出雲風土記』には一か所だけ福見又七にかかわる頭注がある。意宇郡条「筑陽川、源出郡家正東一十里一百歩荻山、北流入于海」の頭注に「福見三省云、今日三波入川、出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>星上<sub>一</sub>、京羅木山是也。因考、荻山、即京羅木山也」とある。この頭注は、『出雲風土記解』の文化二年五月伴信友書写本を祖本とする横山家甲本（嘉永六年（一八五三）五月長沢伴雄書写）、文政三年（一八二〇）三月川崎重恭書写本（国立歴史民俗博物館所蔵（平田篤胤資料））などの当該箇所頭注として「訂」の注記とともに書き入れられている。両本の奥書によれば、「訂」とは『訂正出雲風土記』の略記であり、伴信友自身が文化二年以降文政九年までに諸本と校合するなかで書き入れたものとみられる。

福見三省の言を千家俊信がどのように受容したか、真龍らとの関係も含めて検討してみるべき問題であろう。

22 引佐郡渭伊川、豊田郡天竜川、同郡敷地川、山香郡気田川、南周智郡大田川、同郡宇茹川、山名郡諸川捕物、秦原郡大井川、などに「伊具比」の表記で記述する（『遠江風土記伝』世界聖典刊行協会、一九八〇年）。これらの記述様式が出雲国風土記の影響であることはいままでもないだろう。

23 中村太一『出雲国風土記』の通道記事とその路線復原―推定復原図作成に関する覚え書き、島根県古代文化センター研究論集第二七集『山陰における古代交通の研究』、二〇二二年。

24 隠岐道（枉北道）の比定と諸説については、吉永壮志「枉北道の校訂と研究」、前掲注（23）書所収。

25 関和彦、前掲注（19）書、五八五頁。

26 関和彦、前掲注（19）書、五八五頁。

27 『道草』には「高浜左仲参拜也」と記されているが、『有玉村高林家日記之内書抜簿一』（『高林家史料』一、浜松市立中央図書館、一九九一年）享和二年（一八〇二）二月十六日の記事に「出雲大社之社家高浜左仲殿来」とみえ、高浜左仲が遠江国有玉村（浜松市）の高林方朗宅を訪問していることが知られる。

〔付記〕本稿は、JSPS科学研究費基盤研究C「地域における神話的古代出雲像形成とその歴史的 성격の研究」（課題番号20K00882）の研究成果の一部である。高林家文庫については浜松市立中央図書館、『筑紫日記』については、調査ならびに翻刻の許可をいただいた皇學館大学附属図書館にそれぞれ記して謝したい。

表1 内山真龍西国旅行全行程(山下政嗣『筑紫日記』による)

月/日	経過した国	宿泊地	月/日	経過した国	宿泊地	月/日	経過した国	宿泊地
1/21	遠江	三ヶ日	2/21	出雲	松江	3/18	豊前	苅田
1/22	遠江 / 三河	藤川	2/22	出雲	杵築	3/19	豊前 / 長門	赤間関
1/23	三河 / 尾張	名古屋	2/23	出雲	〃	3/20	長門	船木
1/24	尾張	〃	2/24	出雲 / 石見	大森	3/21	長門 / 周防	宮内
〃			2/25	石見	江津	3/22	周防	呼坂
1/28	尾張	〃	2/26	石見	三隅	3/23	周防 / 安芸	小方
1/29	尾張 / 美濃	墨俣	2/27	石見	高津	3/24	安芸	海田市
2/01	美濃 / 近江	醒ヶ井	2/28	石見 / 長門	宇田	3/25	安芸	本郷
2/02	近江	鏡	2/29	長門	萩	3/26	安芸 / 備後	横尾
2/03	近江	三井寺	2/30	長門	四郎ヶ原	3/27	備後 / 備中	矢掛
2/04	近江 / 山城	京都	3/01	長門	赤間関	3/28	備中 / 備前	藤井
2/05	山城	〃	3/02	長門 / 豊前	小倉	3/29	備前 / 播磨	有年
2/06	山城	山崎	3/03	豊前 / 筑前	赤間	4/01	播磨	加古川
2/07	山城 / 摂津	有馬温泉	3/04	筑前	博多	4/02	播磨 / 摂津	みぬめの浦
2/08	摂津	神戸	3/05	筑前	轟木	4/03	摂津	大坂
2/09	摂津 / 播磨	長坂	3/06	肥前	小田	4/04	摂津	〃
2/10	播磨	追分	3/07	肥前	彼杵	4/05	摂津	〃
2/11	播磨 / 美作	土居	3/08	肥前	矢上	4/06	摂津 / 河内 / 山城	八幡
2/12	美作	壺井	3/09	肥前	長崎	4/07	山城	京都
2/13	美作	勝山	3/10	肥前	長崎	4/08	山城	〃
2/14	美作 / 伯耆	板井原	3/11	肥前	彼杵	4/09	山城 / 近江	草津
2/15	伯耆	米子	3/12	肥前	山口	4/10	近江	醒ヶ井
2/16	伯耆 / 出雲	出雲郷	3/13	肥前	佐賀	4/11	近江 / 美濃 / 尾張	起
2/17	出雲	大庭	3/14	肥前 / 筑後	善導寺	4/12	尾張	名古屋
2/18	出雲	〃	3/15	筑後 / 豊後	豆田	4/13	尾張 / 三河	藤川
2/19	出雲	本庄	3/16	豊後 / 豊前	羅漢寺	4/14	三河 / 遠江	新居
2/20	出雲	〃	3/17	豊前	大根川	4/15	遠江	浜松帰着

内山真龍の出雲国踏査―『出雲日記』『弥久毛乃道草』『筑紫日記』の整理―(大日方克己)

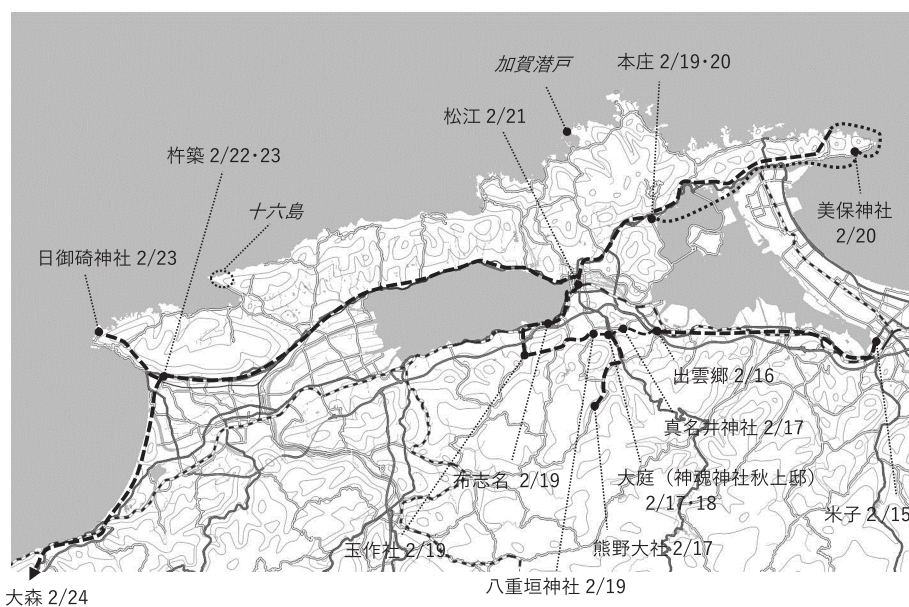


図1 内山真龍一行の出雲実地見聞ルート (地理院地図に加筆)

表2 『出雲日記』『弥久毛之道草』『筑紫日記』 対照表―米子・出雲国内

2月16日	2月15日
富田川←吉左	2月15日
<p>能義郡吉佐、門生、安来、いしり川、と太(富田)川を渡り行。昔の名ハ伯太川、野城川といひけるとぞ。</p>	<p>伯耆国と出雲国の弓浜にやとりす。明なは意宇郡にいらんとすれと、道しれる人一人もなし。先主を呼て黒田の駅に至らん道教えよ、と云に、杵築に詣る旅人ハ爰より船乗して松江につき、又平田を道行こそ近けれ、駅路ハ其名も伝へきかす、されとしか云所やあるなる国人わたりきませり、呼いてん、とてまかる。頓て出雲人ぬてこし、意宇郡神魂社の神主秋上得国と告て、霰打遠江の国人よ、遙けき道の隅く山川もつ、ミなく越渡り来まして、我國のかみてふ上代の地尋まくするおもむかしよ。称唯、吾国の風土記によるのミ、さらハ先、八雲立と詔ませし八重垣・意宇・熊野・伊邪那岐・揖屋・神魂の社を拝ませ、其道のゆきて有し黒田の駅ハ三百年計の昔、笠の長者と云人の住ける時、火つきて焼たり。其後、意宇町と云ちひささまぢ有しも、寛永十三年、松江の城を築てより移りなとして絶えたり。今ハ黒き土のミ残れるをしるへしとして、そこより四方を見はるかし、神魂社に詣てん時ハ、我宿りにやとらせ、国形よくしれる人有、松江のとのに仕奉る藤原三省なん呼びてあはせまく思ふと云。此人を置きて又有やととへハ、神門郡の郡監源時照なん早く身まかりて今ハなしと云。夜更るま、に別れ去。嬉しくて思ひやれハ、昔有けん遍土翁てふをちなん、かゝるをハ云へし。</p>
<p>井尻川を橋渡す。是は川上文理(母理)の里より流落る古への伯太川ならん。戸田(富田)川を橋渡す。こは古の野城川ならん。皆東に海の入江有。</p>	<p>米子駅に泊ぬ。手間山口。今テマノヤウガイト里人云。是ヨリ南東二当ル。今に烽有。米子東町唐津屋吉左衛門。</p> <p>此夜し隣宿なる出雲国アツバの神主秋上大祐と云人來りて、国かたのこと共問ふに、未つばらにはあらねど、そこかしこあき事も有。又、松江士福見又八といふ人、風土記の道はゆたゞすべくするよし、此人に引あはせまくちぎる。</p> <p>小雨ふる。雨つ、みして米子を立て、町はづれに出、舟津を見る。しづけし。忌田の村と吉佐の里とあはひに坂有。伯耆と出雲と堺杭有。</p> <p>並松有道を行。此所ハ米子城の申の方に当ル。出雲国首ハ米子辰巳ノ方也と大祐どのいふ。門生の里を過て、八杉(安来)の駅に至る。米子より三里ほど也。聚千計有。</p>
<p>越ゆれば能義の郡、吉佐村なり。こは此国形の巽にあたりて一國のかしらとする由、門生、八杉杯そ磯回の里むらを通行。</p>	<p>夕日影移ろふ頃しも米子に出ぬ。此湊は沖行大船の纜を繫く所にしあれハ、あれば、家居広くいと賑ハシ。城は町屋の西なる入江の岸に臨める松山の上にあリ。因幡の国の守のしらすよしにて、其弾内荒尾何某預守るとん。磯部に立止りて北の海の浦回を見るに、春日の夕栄うなの上を照らして飽かぬ様にさりける。此州の弓浜遠沖放てさし出たり。其根を米子の東に続き大仙の麓船の上、名和の湊など遮る物なく見へ渡ぬ。</p> <p>弓浜の弦やつれて帰る丁</p> <p>隠岐の州そ此灘の北三十五里にあたりとぞ、元享(弘)の帝の彼島よりこの名和の湊まで夜の間に御ふねはてさせたまひし杯、目のあたりのやうにおもひ遣りぬ程をうつして打詠けるに、永き日もや、暮まくするにそ宿りにつきぬ。この夜ざり、出雲の州の神魂の宮の神主秋上大祐得国とふ人出來り、其国の風土記のいにしへかたを今に引合たる物語など、夜もすから飽かすかたらひ、吾か輩其国に至らん日そ翁か住る大庭のさとをかならず尋たまへと、くれくもことかせして別れぬ。</p> <p>板屋原より 根尾へ 式里 根尾より 二部へ 壹里 二部より 溝口へ 式里 みぞ口へ 米子へ 三里</p> <p>朝より打くもり雨ふる。卯の時はかり雨包ミして宿をたち忌田てふさとに行。少き山の上に出雲伯耆の堺あり。</p>

出雲日記

弥久毛乃道草

筑紫日記

2月17日	2月16日	
<p>神魂神社・秋上邸←熊野大社←神魂神社・秋上邸←伊弉諾宮</p>	<p>出雲郷</p>	<p>揖屋←赤江</p>
<p>幸して、老翁の家に来つく。</p> <p>斎垣こもらずみ熊野の空</p> <p>天雲の八雲立のほる中にしも</p> <p>は、見れとみれと雨雲覆て、ひるとも思ひたらず。只ひは山のみ朧々しく、辰巳に見ゆ。扱もうこし程をとへは、昔の道十八里と云ふ。夕つけたり爰にはやとさす彼宿りに帰らんは、暮ぬへし、つかれたり、狼具したくひを蹴裁その尾に□と云に似たり。雨風打しきりて畏こかれと、社にうこなはり侍りて心のうちに唱たる。</p>	<p>やとれるあたかえの渚に意宇川流れておかしき所なれと、雨数降て物うし。此川そひの田つらを行に、をちの教へし社の前わたりか、くろき土のミけに黒田といはんにまさる、所なし。やとれるあたかえの渚に意宇川流れておかしき所なれと、雨数降て物うし。此川そひの田つつらを行に、をちの教へし社の前わたりか、くろき土のミ、けに黒田といはんにまさる、所なし。先をちの宿りにいひ入して、かうく有しと語れハ、今の主も家戸自も勞てやとす、日も高し、云々の社に詣んとて出、意宇川の岩かね踏さくミいくり木根をあそこえ、雨つ、ミの物らうはらに懸りて倒れぬへき山ノ間を分いれハ、底ひの極ミに熊野の大社ハ有けり。神主熊野利大夫かりとめ行て、昼けをす。しはしも猶やハあらしと向さくる山くを、見れとみれと雨雲覆て、ひるとも思ひたらず。只ひは山のみ朧々しく、辰巳に見ゆ。扱もうこし程をとへは、昔の道十八里と云ふ。夕つけたり爰にはやとさす彼宿りに帰らんは、暮ぬへし、つかれたり、狼具したくひを蹴裁その尾に□と云に似たり。雨風打しきりて畏こかれと、社にうこなはり侍りて心のうちに唱たる。</p>	<p>揖屋を過るに雨いとふれ、ハ、出雲江(出雲郷)にやとる。</p>
<p>ふな人は誰為ならしあ引すとおうの川瀬に袖ぬらしつ、</p> <p>など云つ、谷のあはひを此川べらに付て、二里よ計逆りて、かの熊野大社をおろがむ。此神主治大夫どの家立寄りて昼飯をしぬ。こ、にして間に、此川の源は音なしの瀧てふ有。其家を出て行さには、いと雨のふりきて、雨障をさへ通りて袖もしとぬれ行く。又二里ほど来りて、かの神魂社の神主の家に宿る。</p>	<p>さやけくも見むと恋ひしを雲あひておうのうらわをよのかめふるや</p> <p>雨ふる。出雲江、古の阿陀加夜を立、オウ川に副て西へ一里ほど来る。大草村を通りて、イサナキノ宮に詣。オウ川の北辺にして、此宮南(西)カ一面也。山代の里を通。北に高き山有。こは今チャウス山とも、イサナキノ山とも云。古へのアツガキ山也。烽有。そゆしも三四町ほど南に行。かの米子にしてちぎり未かへらず。されども当職大江殿并みさほどの言によて、今宵こ、に宿りて、松江なる福見氏へ引合せまくちざりて、熊野の大社をさして行。雨いたくふれ、ば、いたさくひすれど、おう川に網さす人を見</p>	<p>赤井(江)の里にして昼食をしぬ。アラシマの里を過て、伊(意)東里を過、イヤ里、こは古の伊賦夜の里也。</p> <p>出雲江の里に至。熊野川の東の岸文蔵と云人家に宿る。八杉より三里也。メ六里。海辺ろに行に、旅にしていやしきふれる雨にぬれおうの浦わをうらさび行も</p>
<p>瑞垣めぐらす美熊野の宮</p> <p>真龍</p> <p>詣て来る人も稀なるにや、宮つこも見えす。其宮神主何某の許に尋ねて昼のものとなへ、またこしるる野道を立帰るに、山風はけしく吹卷、雨弥増に降来りて葉を乱すかこと々々行なやミぬ。</p> <p>こころなく降り来る雨の出雲路や</p> <p>泊りさためぬ身とせしらすて 秀穂</p> <p>山々のかひより流る音なし、川も嶺の雪消に水重増りて、溺る瀧津瀬の逆巻響ハ鳴神の耳に轟くはかり物云へとこも通りす。ひとりく成りて旅ころもしほりもあへす。</p>	<p>終夜の雨、明けぬる朝もしとくふりて、空もふたかれることやるかたなくて、時をうつしぬ。流石に海土のふせ屋のいともうれたたくいふ。せかれハ留まれるよしもなく雨つつミこしらへて立出ぬ。これよりハ磯辺を離れて意宇の川辺の流れに添ひ道の左に入りぬ。大草のさと、黒田の里を過ぎて、茶臼山てふこそは、いにしへの握垣山ならん。其山の麓なる森の木蔭に鎮り座す伊弉諾の宮に詣ぬ。それより山代むらに出つし、も、上つ代の名に負里なりとそ。尚も彼川の流にさかのほり、いと遙けき山里を行に春雨のふりしきり、衣手濡て打濡つ、行々て、爰そ熊野機樟日の命のこもらせたまふ青垣山の御社を拜るかミ奉りぬ。</p> <p>天雲のや重たちのほる中にしも</p>	<p>筑紫日記</p> <p>赤井の里よりハ意宇の郡なり。荒島、伊東、いふやてふ磯部を行に、しハし雨の止ミけるひま、雲の絶間に引榮たる伯耆の州の弓浜、こなたに此州の嶋島てふ家居はさたかならねと遠近に煙たつて見ハ渡り、ことなる眺望のいと物惜きを、あやにつくにもまたも雨の降り来て、左はかりのけしきもやミと搔つらし、詠もつれなかりけるを恨みて</p> <p>かけてこし意宇の海回にくるしくも</p> <p>今日朝より打ふる雨に磯辺を行暮て出雲江に泊ぬ。</p> <p>伯州米子 雲州八杉へ 三里</p> <p>八杉より 出雲江へ 三里</p> <p>意宇郡アタカ江村 宿文蔵</p>

2月18日	2月17日
神魂神社・秋上邸滞在	
<p>つとめて使を遣ハせりけん、藤原三省、時のまに來たり。春日もくれなん迄物いふ。さる間に老翁帰り來り、かく定かに宿れるをうれしむとて、意宇川になつらす。頓て皿けにうず高う盛て出せるハ伊具比也。大口の尾鱗の鱸にもまさりぬへし。</p> <p>意宇川の石ふミならし釣たれて我に得しめし眞魚そ此まなとりあへす、いひたるを打ちかへし詠吟たり。</p>	<p style="text-align: right;">出雲日記</p> <p>今の主は大江弟をみさほ又の弟を左金五と云。此金五主は、杵築に仕なまつりておはす。戸刀自なんよくいたはるに、家こそりてむつまし。</p>
<p>天菩薩(穗)日命座て天降給う釜。尼子春(晴)久十六歳之時之冒鏡、同太刀、作は豊後僧定秀也。毛利輝元の奉る横刀、作は紀の新太夫行平也。後鳥羽院御歌、かたも定めぬ眺のかね。浪こさば浦見んとこそ契りしかいかにかに成行末の松山。細川玄旨歌、そのかみや左右に廻り相て契り絶せぬ天の浮はし。水無瀬中納言氏成、廻りあへる神のめぐみや浮橋の神もしる、世を渡すらん。唐よりますすらすをのこし鏡有。凡大サ二尺余也、中らの高くして、今はくもれり。キツカハ(吉川)広家戦にてカチてトリ來らす也。</p> <p>尾州ヨリ日之御崎へ奉風土記奥書</p> <p>日本風土記六十六卷、今纔存出雲国一冊而已、是神国之徴兆也、依為当国之靈物、奉寄進日御崎社者也。</p> <p>寛永十一年甲戌秋七月日</p> <p>從二位行権大納言源朝臣家(義)直</p> <p>キツキハ日隅宮、日之御崎ハ日シツミノ宮ト云也。国造両家千家北島也。今ノ千家ノ若殿ハ杖(秋)カ一代彦、北島ハ直千代麻呂、簾中はいつれも都公家方より入給ふ也。</p> <p>秋上の翁を賀まつる歌</p> <p>八雲たつ 出雲の国に 里はしも 多にあれども 名だゝる おうの川ゆの 岩さかに ひもろきはやし 宮はしら 太敷奉り 天の原 千木高しらす 大神の 御魂のふゆを 冠りて 仕へます君 萬代に ささく居まふして 取もたす 榊の枝に 白髪付 木綿しでかけて ゑらくに みほさままつらせ ねむのはに</p>	<p style="text-align: right;">弥久毛乃道草</p> <p>大江どののはらから、ひねもすよすがら風土記の言どもかたらひて、いとこに入りぬ。</p> <p>雨はふらねど空行雲さわぎて、さぐもれり。朝、辰の時計、かのこなたより昨日云やれりし、松江土福見又八藤原三省てふ人來て、ひねもすりし、我のし風土記のことゝも間に、いと才有人也と見ゆ。しかはあれど、地里(理)は委しかれど詞は明らけからず。</p> <p>大庭神魂宮神玉</p> <p>米子にて契てし大庭の里の秋上得国の館に行きてこと合ハすに、其人ハまた旅にし有りて帰らねと、其長兄大兄(江)、次の名ハ操、家戸自こそりて、いとねもころに留めてなしけるを、人々よろこひありし、勞れを忘れて終夜物語していたく更ぬれば、いぬぬ。</p> <p>出雲江分 伊弉諾へ 式里</p> <p>伊弉諾分 伊弉諾へ 式里半</p> <p>熊野より 大庭の里へ 式里</p>
<p>けふもまた雨の降つあるも、如何に立出なんやと云るを、主はらからひつと、人の袖ひきと、め、客人のため、意宇の川辺に綱引かせぬとて、この川の名に負鹹を繪に作り皿筥に盛會ハして朝飯に添もてなしけるそ、いと恐かに、二なふ覚へぬ。</p> <p>忘れぬや皿に柳の糸つくり</p> <p>こ、此国の守に仕まつれる福見亦八藤原三省とふ人こし、いにしへのふみ好みて、この出雲の国かた、つはらかに尋ねてしれる人にしあれば、引あわせまく云ひ遣りぬとて、まち居けるに、程もなくて其ひと出來り。昔の根のななき日もや、かたふくまで、別なくかたらひける。折しも彼得国の翁も帰り來りて、こと違えずやとり居けるを嬉しと、酒の肴とり出して、神魂の社の古るき世の伝杯もの語して、尚も吾か輩の国めぐりに、名所の落ることなく、その直路ハかくなんとさとして、むつましけなるにそ旅としもハ、直今の主大兄ぬしに誘れ、神魂の御社に詣て、いともしこき神室など、くさく、拜ミ奉りて家に帰り、斯して今宵も爰にやとりぬ。</p> <p>出雲の国大庭の里なる神魂の神社の榊の枝を取て 読ける</p> <p>意宇の国 かもしの宮は いにしへの ことの 秀穂 残りて今の世に 国の宮つこ 出まして 榊の 枝を御手にとり 御垣とよもし 謡ひつつ 宮もと、ろに参つとも 遊ひたまひし 其榊を 今日の日日に得かたぬしき</p>	<p style="text-align: right;">筑紫日記</p>

2月19日	
本庄 ←	松江 ←
<p>けふはいなんとするに、をちも今の主も歌よみてわかたれかたくす。「強て別れんも、年高き彼方此方の、又いつかハと契らん、心もとなさおしはかれて、いふ事なし。日たけてやうくいぬへくなりぬ。中小付たる罾を取て、こハ神魂宮の神遊に国造詣て、さいはいうたハす取物の枝なり。こ、のしるしと笈に納めてもたまへと、各くまりて物らいひかはす」(以上、行間に自筆書入)ゐてこし文雄、</p> <p>かく計案しと思ふ梅か香を 別れかゆかん旅のつれなさ 人々もよむ。立出るにも、送りして玉銚の引裳の神をいはひをらん、筑紫津かけて八衢のちまたもまとハす行めくらせ、京に至らん頃をひハ、風のたよりにも聞えてしかたと云も、なミたくまし、。</p> <p>〔画第四図〕清水寺、松江・来待の鳥瞰図 貼紙「意宇のウミ 木待・宍路ホ、キノ郷 松江」 江城「南黒田 西清水寺 東弓浜内ウミ北」</p> <p>空晴やかにて、玉造木待乃木の海へを行、沖なる網引釣舟を見て、此海ハよの所よりハ、めてたき神代の伝へも有て、海士のわざをも尊しとて政定、 意うの海の沖こく船ハ打竹の とを、まゝに 鱧釣かも となん、水鳥のむらく浮居るも、あやに見つ、ゆく磯にハ人もあさる。</p>	<p>出雲日記</p> <p>朝曇りたれど日のめ少し見ゆ。この祝部が家にして、おう川のいぐひ、うつぶるい(十六島)の生のり(紫菜)ほどあへす。</p> <p>辰の時計に出て、東に入りて八重垣神社を拜見。そゆ忌部の里を過、野城(白)川に付て三里計来て、玉作社、玉御祖神をおろ(が)脱力)む。</p> <p>雨ふり雨つ、みする。しかして 凡南をさして、き(来)町、富士名を通る。こは西北道也。野城の里の北に、西へ入る山中道の古びたる有。こは古への正西道也。又行ほどに、出羽守どの、城有。松江の駅家に至昼飯をしぬ。雨つ、みぬぐ。是追玉作より三里也。是より山のあはひを東に入れて、古の千酌海道也。又三里計来て、本庄村あつたてふ人の屋に宿る。凡九里計也。</p>
<p>大庭合 玉造へ 三里 玉つくり合 松江へ 三里 松江より 本庄村へ 三里 出雲国島根郡本所村 宿為五郎</p>	<p>筑紫日記</p> <p>朝、日はくもりぬれと、雨もふらす、ひとく歌読て別れを告る了か中に 斯はかり樂しとおもふ梅か香を 別れか行かん旅のつれなさ 書緒 翁も歌読みて名残を惜み、天放る鄙の長路もつつみなく、故郷に帰るさそ何所よりも風の便りを待なんとて、別れぬるそ、いと涙くまし。</p> <p>斯て翁のおしへのまに、八重垣の宮にまかて、拜ミ奉る。こ、に鎮り座御神を素盞雄命、櫛稲田姫命二柱、それより山路を軽て玉造の宮に詣てぬ。かつき奉り了。この出湯杯打見て、 富士名てふ里部を過ぎ松江のうみの磯部に来にけり。こそは意宇の海とてことに目出度神世の伝もありて、魚釣する海士のわざもいと尊し。 意宇の海の沖漕舟を打竹の とをく、に鱧釣かも まさ定</p>



2月21日	2月20日
松江 ← 本庄	本庄 ← 島根半島北岸 ← 美保神社 ← 本庄
	<p>朝酌の狭戸を渡り、島根郡の道たとりて、いさ此島根の岬に有るとき、し三保の社に詣ンとて、昔の郡家の所より船に乗て漕ぎゆく。船の名ハそるか、上つ代のもろたふねハしらねと、我國にてハ丸太船とも云へくちひさきかとく走りて、みさき近づく。此岬ハ国のはてなる北へらにて、日ノ緯にハ(貼紙「経東西」)丹後の都々のみさき、日横にハ伯耆の岳也。かく見るまかひに空かきくれて、雪こほすか如くふるなころ、いと高く舳舻かへらんとす。船ハ乗はなちて、岸をつたひ、山をこゆるも、かゝる磯道の岩くえハ習ハさりけり。加賀のくけ戸を見まくおもへと、嵐負風類に吹て岸も崩れねと波うつ中くにて、浜辺を立離まくすれと、島根の限りハ磯つたふをち鳥ならましハとおもへり。</p> <p>〔画第五図〕弓が浜・美保神社・美保湾鳥瞰図 貼紙「意ウの内海 弓浜」</p> <p>小国秀穂</p>
<p>風あらくして雪ふれり。いと寒くあれど、宿りを出て行に、足もかゞりてあゆみかた也。さ昨日来にし道を松江に行。やうく至りて、八間町あらめや九兵衛が屋に宿る。まだ午の時頃也。髪をゆふ。夕さつ方まで雪やまずて、風もいと寒し。只三里也。</p>	<p>空さ雲れり。けふは庭もしづけ、れば、舟のりして、みほの崎迫行むと願ひたつ。はや、津津行ほどは小雨そほふれり。そるかてふ少なる舟にのりて、舟人約して漕行。内海なればことにしづけし。天雲にかくれて、つばらには見えねど、東南には火神岳の真白に見えわたり行に、伯耆国弓島と出雲の崎の間は、さ、二三町許も有。そこゆ大海原に出て漕行くほどに、浪も少しあらく、ことに詫しきは例の雨也。五里ほど来て、三ほ(美保)の大神・事代主命、みほつ比売命社をおろがむ。又其わたりなる家にして飯をしぬ。みほ崎と伯州大山は真々南北也。米子トタズミ(手角)ト辰ト戌ノ方也。かくするほどに、あらち影りて浪あらけれど、雨つ、みしてのりて、からき崎二つほる過る迄、いとあやうくして、語にのべがたくなんあれば、を、してふりに上る。それゆ磯伝ひて、いとゞしく峻き岩が根の浪寄る所を、まぎ通りて行。いと畏こかりき。</p> <p>はなりそのありその浪にぬれつ、も 畏き道をなづみてそ我くる</p> <p>長浜、福浦、守山(森山)、シモウビヤウ(下字部尾)、タスミ(手角)、マンハラ(万原)、長ミ(長海)、野原などなど過、いと高き山をも越て行に、雪いとふり風もあらければなやみぬ。日の暮行めれば、やうく道をとめて本庄に至りて、きぞの夜宿りし所に行て宿る。かゝるくるしきはあらじとぞ人々いふ。凡五里也。舟路を合千里也。</p>
<p>けしからず朝風はけしく、夜の間に雪積りて、野山の分ひためなく、往くさに見てし道ながら、さたかならず。尚も風立搔曇り雪の降り来て、日影たちまちにふたかり、西東のあやめもしらす、衣手寒く、肌の赤、みて袖なる雪を打はらひく行方も失ふはかり。日そまた己の時はかり、松江に着て終りぬ。</p> <p>本庄むらゝ 松江の城下へ 三里</p>	<p>雨も降らず。卯の時はかり本所のやとりをたち出て、そるかてふ少さき船に乗りて入江を漕行。折しも雲引覆ひ、雨のそほふるにそ、雨具引かけてひそみ居るに、弓浜の岬をこき離れてハ、果しなき大海原を追風の俣、時の間に馳せて出雲の国の北の果なる三保の御崎につきぬ。この所にまします事代主尊の広前にうなね突奉りて、汀の家居に立寄。浦の童の磯のさち得てひりひ集めし小貝のあつもの珍しかに食して、頓て元のふねに打乗り漕出ぬるを、科戸の神のあらびますかも塩風烈しく吹巻し、浪雪のことく、船忽にくつかへらんとするに、あわやと怖度むら肝のこゝろときめき、人々かしら突あて、玉の緒今や絶ゆると、誰れなく神に祈る。梶取も色青みてすべなく見えけるにそ、しハし風の透間を得て、磯回にふねを漕寄、乗はなちて、それより岸部にあかりて、浦伝ひするに、人の通ハん道としもなく、岩根凝り浦磯路の岸崩れ、立浪の打來る中を衰かさかうふり攀上り飛行さま哀れんと見えあらましを、</p> <p>葦鹿飛ぶ岩根島根や浪の花 斯して長浜、福浦、宇井、多須美(手角)てふ浦里を山に登、磯部を伝ひ、荒汐のいと辛して、黄昏過る頃、海士の玉藻を茹めめのやとりながら、きその夜の縁にしに寄て寝にけり。</p> <p>本庄むらゝ 三保ヶ関へ (往來) 十里</p>

2月22日		
杵築 ← 楯縫郡 ← 秋鹿郡 ← 松江		
<p>出雲日記</p> <p>空少高うなりてしらみわたるも、夜のまに降りつミたれは、朝戸を押し明けたも、鳥の声たに聞えず。只佐田のうミのミ雪のひまある所なり。</p>	<p>弥久毛乃道草</p> <p>空曇りて折ふし雪ふれり。鳥根郡松江の駅の宿りを出て行に、いと寒けく足もかざるめれば、雪轄てふ物をはきて、白雪をくゑはらかし行に、山辺ろ道の辺も雪まわ、しう積りぬ。鳥根郡、秋鹿郡ト堺なる浜サダ村を過るに、五間計の土橋を渡る。こは古へのサダ橋。又北に海有。古へは大なる海なるを、天平の頃しもエリ堀、岸壁として二つの川を作りて、北の海に流入れ、今水町田の二十町ほどもあり。西長江の里を過。松江より式里也。秋鹿駅、家村は多にもあらず。大垣の里に足高の社有。鳥居道正卯に有。いとふるびたり。下大野村の海辺に角森大明神有。下伊野を通る。風土記に見ゆ。秋鹿郡・楯縫郡・堺杭有。小坂井(境)村、園、タク村、平田駅を過る。さ昨日松江の殿なん杵築の大神に詣させ給ひ、又従人をしてけふ詣させ、明日は神樂を祭(奉)カリ、むさしへの□迄になし給ふべくなん。さあれば、こ、かしこ道の中も清らにして、木丁あはひなどに休所有。火ノ大川の堤を行に、「タケシ」村。楯縫郡・神門郡 堺杭有。けふのひねもすに雪ふれ、「ど」カ、少し空晴まくするに、はや日の暮行は、杵築の駅なる備前屋左十といふ人の元に宿りす。凡里程十里也。</p>	<p>筑紫日記</p> <p>頃く晴れて朝日にこやか也。松江の宿りを疾く立出て杵築をさして行に、きその雪甚たく降り積りて、尚風の烈しかるに、人々雪沓てふものはきて行く。けふもまた晴ミ曇りミ雪あられの降来て、春日のけはひもなく、意宇の入江に浪たちて。魚釣する海士の小船も見えず。秋鹿の郡の磯部を過て、楯縫の郡今八里も打ひらけ、道も平かなる国原なり。千早振神代の伝の大蛇の住けるてふ鳥上山ゆも落来る簸川とかいと大きな流れを左に見てしこそ、むかし神戸の海に落て杵築の海辺に入しを、末の世、川筋変りて、今八松江の水うみに流て、意宇の郡の浦に出ると也。こをもて、およつけてむかしをはかるに、此出雲の国かた、能義の郡、意宇の郡、大原郡杯東南に寄り、本つ国に続きたる也。鳥根、秋鹿、楯縫より神戸の杵築迄北西につらなり、海を隔てし物ならん。さるをいつしかもの変り、ほし移りて海もあせて国原とは成ぬらん。鯛の浦、十六島など、秋鹿、楯縫の左にあたる浦部なり。右のかた高き山部に武蔵坊が住けるてふ鰐淵寺あり。神戸の郡に入れば、田の面いと広し。石見の国の堺にあるとふ佐比女山、雲を凌ぎて雪の充、唐国の香爐峰も斯やと、夕日まはゆく見渡する。漸申の時ばかり、神戸郡杵築の浦に着きて宿りぬ。</p> <p>鳥根郡松江 〆 秋鹿郡長江村 〆 式里          長江村より 大垣村へ 〆 壹里          大垣村より 楯縫郡平田村へ 〆 三里          平田むらゝ 〆 神戸郡杵築へ 〆 四里          大社宿備前屋佐重所</p>

2月23日

高浜左金吾邸

杵築大社

杵築の社の神遊見んとて速詣。昨日、国の守詣給ふに、道を払、水駅を設なしたり。けふハ、守の使某なん詣と、人多く立つ、くを、国造の遊ひし給ふとて、さき追の声聞えて、興高か、けて日すみの宮にかきいれ、いと久しくして鈴の音のかそけく聞えたるか、いと尊し神遊殿に渡り給ふを見まらすれハ、蔽のミカひを冠らし、いつみてくらの取もたして事をへましぬ。神子かともハ、いろく衣長く着なしひれ打かけて、み前の櫛か枝にゆふしてたるを、鈴と共に深添持て、ゆらくと振つ、まひ、拍子うつをのこらか、若きハ柴ある狩衣のめてたきおよつけたるハ、烏帽子の角そ、けきぬのにはひもうつろひたれと、髪ひけのわ、けたるか白くて尊し。

昼つ方、齋庭をまかて、人々云やう、意宇のをちか子金五主なん爰に在とときく。尋ねて物いはんとはかるに、けふの神ンそひに仕奉しを、客有とや告げん。くち葉色の狩衣のそはをつミ、沓を板敷に投やりて速物いふ。此間に酒もて出、うすあわひ、紫のり、藻はの数くをも足してのミ喰、主ハ烏帽子のかたむきたるをもたなしらすいひわたるを、ひのミ崎に詣なん、夕さりと契りていてき。

出雲日記

弥久毛乃道草

筑紫日記

空よく晴たり。出雲の国内に來りておるれば、人々よろこほひて、朝日よく八百丹杵築の大社ををろがむに、松江の武士來りて、大御神樂有。国造ゆ、しうこしにのられ、宇迦の「 」をあともひまして、神樂殿にいらせられて金のり□有。十二人有。よみて奉る歌。

みづはさす青垣山の春霞かゝるみやびは 神ながらならし  
しかして、かの大庭秋上より來る文を持て、高浜左  
仲参拜也。

大江殿方養子高浜左近吾てふ人にあひ、云かたらふ。

曇れる雲なくなりて風も風き日も長閑成に、けふそ八百丹杵筑の宮に詣なん。百足らぬ八十の駅路越きぬるも、此大御社拜ろかミ奉らんためなれハ、人々髪あけて荒袴の旅の衣のあか付るも其俣なから、ひめ置たるたふさき改むすひ、羽織着一と重取よそひ、宿りの主ともなひて、神の御鳥居越つ、も、玉垣の内に詣て、日すみの宮の広前にぬかつき奉りぬ。けふしも国造の神遊ひしたふ日なりとて、此州渡りの人々多に集えるか程もなく、先追のこゑするにそ、吾か輩も諸ひと、共にうつりつまりぬ。頓て烏帽子に白張着たる者勢并しとく揃えて、国造の召れたる興昇出て、御あらかの階にかけ登り御としるの内に入らせぬるか、鈴が音のさやぐのミそ、かそけく聞こえつやらありて下か、せ、それより御神樂殿に渡らせたまひ、蔽の御幣取りもたして捧たまふ。いと尊くなんありける狩衣風折の人々多に并居て、齋まつり、八乙女の舞神樂、男の拍子打つ音、こころもすみて、目出たかりき。幾日そあれと、今日の此日にこの大御社に詣て、斯尊き神遊ひに逢ぬる身の幸そゆゝらしき、

みつへ指青垣山の春かすミ  
かゝるみやひそ神なからならし 方明  
爰に意宇の翁の末の子高浜左金吾てふ宮人有と聞えけるを、そか館尋ねて行。折しも主そ国造に仕まつりて齋庭にありしを、斯と告やりけるにや、松葉色の狩衣に精好の袴のそばを取り、速に出来ていらへす。遠国よりの客人なりとて、酒肴取り出、食もの数足はしてもたなしぬるそ、別りなきこの主にねぎ申て、人々日すみの宮の御玉串を頂きまつりぬ。けふは日の岬に詣なんとて、尚ととめぬるをまかりてぬ。

2月24日	2月23日
石見・大森←多伎←園長浜←杵築	備前屋←高浜邸←日御碕神←高浜邸
<p>名残惜むやうにて、とくも出ず、何くれとかたる。むかし京に遊びける時、同じ旅ねせし青木元三郎と云し人有。杵築に詣なん時ハ、必問とうひてよとこそいひしか、早く身退りしと聞て、頼めこし宿をはかなみ草枕露置添る旅ねかなしも</p> <p>となん。けふは晴たり。石見の国へとて、小浜の浪間を行。引はへたる磯に白まなこ高う積て、しめたる道さへなし。小松のむら／＼立る中に、とある苦やの軒の庁つかたを見いて、導せんやといへハ、なぞミち引せん、浜の限りをゆかせハ、多伎の駅にいてまさん。此浜むかし大神の国引給ひしつななれる浜なれハ、ゆけとく、いと長しと教ゆ。さてハ海士の苦やも神代のま、に行嗣てや有けんと計おもふも所から也。神門川、神門の湖も、西風に真さこをうつミて、聞きしよりハあせたるさま也。斐の川の西の海に入た成したくひも多かりける。多伎の駅を過、小川を渡りしまつや口と云所の山を越れハ、出雲の国ハはなれ石見国安濃郡多根の関也。</p>	<p>ほともなくて五十田狭の浜とやらんいふ荒きうなひを伝ひ行。 いにしへのをハしらねと白波のかゝる小浜ハ神ながらならし夕さり帰りく猶うたけす。主も客人も酔て万さいの声、終夜也。</p>
<p>うす曇りのこと、朝け計してよく晴たり。杵築を立行くに、かの左十翁、四五町も送りてきぬ。朝日よく行に、うるはしき松原をへて、神門川の二三町計なるを舟渡して、園の長浜の海辺を伝ひ行。燕々飛今園村有。凡長浜は二里半程也。小池の里を過て、海近き久村の駅を過。杵築より三里也。荒磯廻に咲立浪を海神のかざしの花と見らくしよしも 白すなごくゑはらかして我行と後行かしもよ妹こふらしも 海神のかざしの花と見るまでに咲る波は浦くはしもよ かく吟つ、多儀の家村にして飯をしす。多芸小川有。この里と久村のあはひに、高志よりの山陰道と合て道也。又少し行に、西の山辺の坂に出雲と石見と堺杭有。山に登りて見るに、こ、と日の御崎と西南北也。</p> <p>(略)</p> <p>日も暮行ぬれど、大森の駅に至。家三四百有。丸屋徳右門てふ人の屋に宿りす。此さとに大なる社有。三輪大明神也。</p>	<p>辰の時計出で、日の御崎さして行に、先杵築町の西にあら磯有。岩など多也。こ、を伊楚田狭の浜と云也、そこゆ北に入、山々を越て行に、御崎山ト佐比売山ト正南北也。二里ほど行て、宇龍の駅にて昼けをす。日の御崎の大神・天照大御神宮をろがむ。又もとつ道を帰るに、山の上にて南をみやるに、杵築南に当て、神門川と神門海水ト西海トの中、園の松原見ゆ。下りて又、高浜の家に行て有御食給ひ、うまし物くひて、御飯を得て、かの音に聞龍を見るに、うへくみて有。こは神在月十一日より十七日迄の間に、かのイソダサノ浜に、藻草によりて浮みますを取て、国造に奉り、大社に奉となん。又其夜し備前屋に帰りて宿る。</p>
<p>雲晴て昨日にひとし。曙にやとりを立。きつきの松原を行きて、神戸川を渡る。神戸の湖そ左にあり。今そ浦の真砂を吹あけて、いと浅ミけるとなん、園むらを過ぎ浦部に出進ハ、園の長浜也。 むら肝の心もゆたに震たつ 園の長はま見るハよしも 書緒</p> <p>梓弓磯打つ波のいく里を踏みて久村てふ藻塩焼里回に至る。多きの小川を渡りて多支村に行、異なる岩根の数々磯部に有りて、いと面白き所也。多岐の里に休み居物食して立出ること出雲の国のしりなり。山路を登るに、其山の中腹、国の堺也。下ればつづぬさ這ふ石見の州也。</p> <p>(略)</p> <p>雲州神戸郡大社より はし国の久村へ 三里 (川壱所、舟渡し) 久村より 多岐村へ 弐里 磯道也 多支より 石州安濃郡羽根へ 弐里 磯山道也 羽根より 大田へ 壹里半 大田より 千賀摩(逆摩)郡大森へ 参里 宿丸屋徳右衛門 石州大森銀山御奉行 川崎平右衛門</p>	<p>頓て杵築の浦に出ぬとそ。千早振る神代の伝の五十田狭の小浜になん有ける。是今戌亥の方には島根国原も見えず、果しなき灘の有さま、雲もみな浪とそ見ゆる。磯回の山路を上り下り行く、あかねさす日の岬に詣ぬ。此崎に齋奉るハ天照皇大神、素盞雄尊二柱の大御前にうなね突奉りて、また往くさの道を立帰る。夕さり佐金五ぬしハ浦部迄手引の出居待迎えて誘ふにそ、いなミかたく、そか許に事かるしりくへ繩曳柴たる切戸より一と間に入る。床辺に軸付るを、花入たり。頓て筈も皿もいと清け成に、鯛、石決明、出雲のり、早蕨、木芽第海に山に盛はやしはいはひたひぬるに、時の移るまで酒宴して、まがりも度かさなれハ、主も賓人も酔て万歳樂諷ふに至る。かくして夜いたく更ぬれば、きその宿りに帰りて寝にけり。</p> <p>杵築ハ 日の岬へ 往來五里</p>

出雲日記

弥久毛乃道草

筑紫日記

# UCHIYAMA Matatsu's Exploration of Izumo Province: Organizing “Izumo-Nikki”, “Yakumono-Michikusa” and “Tsukushi-Nikki”

OBINATA Katsumi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

## [Abstract]

In February 1786, UCHIYAMA Matatsu, a scholar of Japanese classical literature in Totomi, surveyed Izumo Province with his five disciples, and in the following year wrote a commentary on the Izumono kuni-Fudoki, 'Izumo-Fudoki-Kai.' The travel diary that recorded this expedition, UCHIYAMA Matatsu's "Izumo-Nikki", TAKABAYASHI Michiakira's "Yakumono-Michikusa", and YAMASHITA Masatsugu's "Tsukushi -Nikki" are preserved. I will create a comparison table of the Izumo province part of the three diary and analyze the actual situation and characteristics of the survey. And I will clarify how it was reflected in "Izumo Fudoki-Kai".

Keywords: UCHIYAMA Matatsu, TAKABAYASHI Michiakira, YAMASHITA Masatsugu, "Izumo Fudoki-kai", Izumo province